

教会とキリスト者の成熟に関する教会論的検討

石崎伸二

はじめに (概要)

2021 年の全国研究会議の発題において、私に与えられたテーマは「教会とキリスト者の成熟」であり、具体的には「教会人としての成熟とはなんであるのか」、「どうしたら教会人としての成熟に到達できるのか」を、教会論を土台に検討するという課題が与えられた。そこで、まず「キリスト者の成熟」とはなにかということを次のように定義して論じたい。創世記によると、最初に神が人を創造したときの良い状態が、罪が入ったことにより神との関係が壊れてしまった。しかし、主イエス・キリストによる贖いをもって罪が赦されたことにより、罪によってできなくなったこと、すなわち、神を愛し、隣人に仕えることができるようにされた。洗礼をもって神のものとされたキリスト者が、その状態に留まり、肉に結び付く古い人を御言葉と聖礼典によって殺し続け、霊に結び付く新しい人として生き続けることがキリスト者の成熟と考える。そこには、良い木の結ぶ良い実があるという特徴がある。それが隣人への善い業である。

このテーマは、ルターが召し (vocation) に関して論ずる場合の 3 つの領域 (Three estates: 教会、家庭、社会) の 1 つである教会における信徒の召しと考え、筆者の属するルーテル教会の教理に基づき、ルター神学を土台として論じさせていただきたい。ヒューマニズム的なアプローチではなく、ルター神学の、特に sacramental な理解を中心に、クリスチャンの教会人とし

での成熟、また、教会人としての召しについて検討していきたい。

第1章 教会とこの世の関わり

1. 教会とは何か

教会についての定義は様々あるが、まず教会とは何であるかをみてみたい。アウグスブルク信仰告白第7条には、教会について次のように定義されている。「唯一の聖なるキリスト教会は、つねに存在し、存続すべきである。それは、全信徒の集まりであって、その中で福音が純粋に説教され、聖礼典が福音に従って与えられる。そして、キリスト教会の真の一致のためには、福音がそこで純粋な理解に従って一致して説教され、聖礼典が神のみことばに従って与えられるということ十分である。……(略)」¹つまり、教会では「みことばと聖礼典」(恵みの手段: Means of Grace)を通して救いの恵みが与えられるのであり、それを与えるのが礼拝である。礼拝を中心として集められている神の民がキリスト者であるから、キリスト者の成熟と礼拝を切り離して考えることはできない。また、聖書には「教会はキリストのからだであり、キリストはそのかしらである」²と書かれている箇所がある。キリストをかしらとするからだとしての教会は、かしらなるお方とその恵みによって結びついていると共に、かしらなるお方の働きをなし続けるための身体としてある。具体的なからだは、それぞれの肢体が意志をもって動くわけではなくて、かしの意志によって働くのであるが、教会を構成する個々人はそれぞれの意志をもつ人格的存在である。したがって、その働きは決して自動的になされるわけではなく、常にかしの意志を聞くこと、すなわち、みことばに聞き従うことが求められる。³ルターの「キリスト者の自由」第十二には次のように書いてある。

信仰は魂が神のことばと等しくなり、すべての恩恵で満たされ、自由で救われるようにするばかりでなく、新婦が新郎とひとつにされるように、魂

をキリストとひとつにする。この結合から、聖パウロも言っているとおり(エペソ5:30)キリストと魂とはひとつのからだとなり、両者の所有、すなわち、幸も不幸もあらゆるものも共有となり、キリストが所有なさるものは信仰ある魂のものとなり、魂が所有するものはキリストのものとなる、という結果が生じる。ところでキリストはいっさいの宝と祝福とを持っておられるが、これらは魂のものとなり、魂はいっさいの不徳と罪とを負っているが、これらはキリストのものとなる。ここに今や喜ばしい交換と取り合いとが始まる⁴。

「喜ばしい交換」によって、私の罪はキリストの上で処分され、キリストの義が私のものとなるのである。そのようにキリスト者相互の交わりは、共通のかしらによって結び合わされていく。キリストが罪の終わりとなり、贖いとなられたので、私たちは主のものとしられ、キリストの肢体として生きるのであるが、残念ながら、この世にあっては新しい状態になってしまうわけではなく、ただ約束としてそれへの望みをもっているのである。人は現実にはなお絶えず古い人としてもあるからである⁵。洗礼によって死んだはずの古い人(古いアダム)がなおも生きており、洗礼と信仰によって誕生した新しい人(新しいアダム)といつも葛藤しているのが、この世に生きているキリスト者の姿であろう。

ルターにおける信仰による救いの強調は、信仰者の聖化をおろそかにしたのではないかという批判が聞かれなくてもないが、ルターは教理問答の使徒信条第三条に「聖化について」という表題を与えている。聖霊が聖化するのは、「聖霊がわれわれを第一にその聖なる交わりの中に導き入れ、教会のふところにおき、教会を通してわれわれに説教し、こうしてキリストのみもとに伴われるということである」(「大教理問答」)。教会そのものが聖くなった者の集合なのではない。教会が聖霊によって支えられ、聖なるみことばをもっていることを強調し、その中に招き入れられた信仰者が教会において絶えず聖霊の働きに

¹ 「アウグスブルク信仰告白」第7条『一致信条書』(聖文舎、1982年)38頁

² エペソ1:23、コロサイ1:18ほか。

³ 石居正己『教会とはだれか—ルーテルにおける教会』(リトン、2005年)10頁

⁴ 徳善義和『自由と愛に生きる』(教文館、1996年)138-139頁

⁵ 石居『教会とはだれか』11頁要約。

導かれていく歩み全体が聖化と考えられる。それは計ることのできる聖性の量的な増加や、その過程としてよりも、絶えず義人にして同時に罪人である信仰者が、神の恵みの働きに自らを委ねるあり方なのである⁶。

2. 礼拝からこの世へ遣わされる

教会の礼拝で、恵みの手段（みことばと聖礼典）をとおして神の恵みを受け、罪が赦され、新しいいのちに生きるものとされる。私たちは、「恵みにより、キリストのゆえに、信仰をとおして罪の赦しをいただき、神の前に義とされる」⁷のであり、義とされた者は神への信仰と感謝をもって、教会からこの世へと遣わされ、互いに愛し合い、仕え合って生きていく。奉仕もそのような感謝の心をもってなされる。もちろん、奉仕によって神に認めてもらうことが目的ではなく、人々を具体的に助けていくのである。神には信仰と感謝を、人々には愛をもって仕えるのがキリスト者の生活である。そのためには、礼拝で恵みを受け続けなければならない。当然のことであるが、聖書によると、義認のために善い業は全く必要ない。これはきわめて重要なことである。善い業で救われるのなら、イエス・キリストの十字架は無駄だということになる。聖書の以下の箇所が示している。

しかし、今は、律法とは別に、しかも律法と預言者によってあかしされて、神の義が示されました。すなわち、イエス・キリストを信じる信仰による神の義であって、それはすべての信じる人に与えられ、何の差別もありません。すべての人は、罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができず、ただ、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いのゆえに、価なしに義と認められるのです。神は、キリスト・イエスを、その血による、また信仰による、なだめの供え物として、公にお示しになりました。それは、ご自身の義を現すためです。というのは、今までに犯されて来た罪を神の忍耐をもって見のがして来られたからです。それは、今の時にご自

身の義を現すためであり、こうして神ご自身が義であり、また、イエスを信じる者を義とお認めになるためなのです。それでは、私たちの誇りはどこにあるのでしょうか。それはすでに取り除かれました。どういう原理によってでしょうか。行いの原理によってでしょうか。そうではなく、信仰の原理によってです。人が義と認められるのは、律法の行いによるのではなく、信仰によるとというのが、私たちの考えです。（ローマ 3:21-28）

しかし、人は律法の行いによつては義と認められず、ただキリスト・イエスを信じる信仰によつて義と認められることを知ったからこそ、私たちもキリスト・イエスを信じたのです。これは、律法の行いによつてではなく、キリストを信じる信仰によつて義と認められるためです。なぜなら、律法の行いによつて義と認められる者は、ひとりもないからです。（ガラテヤ 2:16）

まず、私たちはキリストの贖いによつて、罪の赦しと永遠の命を恵みとしていただいていることに目を留める。これは受動的な義である。自分の側の一切の行いによらず、ただ恵みによつて神が私を救ってくださったことを信仰と洗礼によつていただくのである。さきに述べた「喜ばしい交換」が生じ、私はキリストの者となったのである。すなわち、「小さなキリスト」として生きる者とされた。しかし、キリスト者はそのような者として教会の中に留まっているのではなく、教会からこの世へと遣わされていく。そこにいるのは隣人である。このように、私たちは受動的な義をいただいて神の子とされた後、隣人のところに遣わされるのである。まずは良い木としていただき、その後、人々の間で生きていくという順番は非常に重要である。その際、キリストが模範となるのであるが、最初からキリストが模範なのではなく、まずは神からの贈り物として受け取ることが大切である。良い木であり続けるために「恵みの手段」と言われる「みことば」と「聖礼典（洗礼と聖餐）」に与り続ける礼拝の歩みが不可欠である。良い木であるということは、すなわち義とされているということ、キリスト者であるということであり、キリストの義の衣を着せられているということである。それは恵みの手段を通して来るので、いつも恵みの手段に留ま

⁶ 石居『教会とはだれか』22頁

⁷ 「アウグスブルク信仰告白」第4条『一致信条書』35-36頁

り続ける必要がある。聖書に「そのように、信仰は聞くことから始まり、聞くことは、キリストについてのみことばによるのです。」（ローマ 10:17）とあるとおり、一番大切なことはキリストの言葉を聞くことである。ルターは『ガラテヤ大講解』でこのように述べている。

だが、キリスト教の真の意味はこうである。すなわち、人がまず律法によって、自分は罪人であることを認め、自分にはどんなよい行ないをすることも不可能であることを認識することである。律法はこう言う、「あなたは悪い木である。だからあなたが考え、語り、行なうすべてのことは神に逆らう。それゆえあなたは自分の行ないによって恵みをかちとることはできない。もしそうしようと試みると、あなたは悪いことをもつと悪くしてしまう。なぜなら、あなたは悪い木なので、悪い実、すなわち罪しか実らせることができないからである。『信仰から出るのでないものは、罪である』（ローマ 14:23）。それゆえまず行ないを先行させ、それによって恵みをかちとろうとすることは、罪をもって神を喜ばせようとするものである⁸。

ある人が、律法と福音の説教を聞き、罪を示され、イエスを救い主と信じ、洗礼を受け、義とされたとき、その人ははじめて善い業を行うことができる者とされる。だから、その義に留まり続けることが必要である。なぜなら、人間の本性はいつも神から離れようとするからである。良い実を結び続けるキリスト者であるためには、「人がわたしにとどまり、わたしもその人の中にとどまっているなら、そういう人は多くの実を結びます。わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないからです。」（ヨハネ 15:5）と御言葉にあるように、イエスから離れてはいけな。なぜなら、イエスを離れて行うことは善い業ではないからである。では、イエスはどこにおられるのか。イエスは恵みの手段である御言葉と聖礼典におられる。だから、私たちも恵みの手段をと

して与えられる恵みに与り続ける必要がある。私たちは受け身の信仰なしに能動の信仰を持つことはできない。それはボールを受けることなしに投げることが不可能なのと同じである。まず、神はみことばと聖礼典によって私たちを養ってくださるのである⁹。そして、それをいただくのが礼拝である。

キリスト者の成熟というのは、この世の概念として考えるところの、「自らの足で立ち、自らの判断で何でも判断して行うことができる人」のことではなく、むしろ、罪人としての自分の力に絶望し、神のみに信頼し、古い人に死に、新しいいのちに生きる者のことであろう。しかし、そこには古い人と新しい人との葛藤が常にある。パウロは「私には、自分のしていることがわかりません。私は自分がしたいと思うことをしているのではなく、自分が憎むことを行っているからです。」（ローマ 7:15）と言っている。また、「私は、私のうち、すなわち、私の肉のうちに善が住んでいないのを知っています。私には善をしたいという願いがいつもあるのに、それを実行することがないからです。」（ローマ 7:18）とも言う。このように、確かに信仰と洗礼によって新しい人になっているはずなのに、依然として私たちは古い人と新しい人の葛藤の中にある。信仰によって義とされた人は新しい人になる。聖霊が彼を動かすが、信仰は一度にすべてを変えるのではない。古い性質はまだ完全に死んではいないからである¹⁰。クリスチャンは信仰に生きながら、なおも肉において生きている。肉は信仰の命に反抗し、常に信仰を攻撃する。したがって、クリスチャン生活は、聖霊と古い人との戦いであり、信仰と古い人の欲望との絶え間ない戦いである。肉に対するこの戦いに信仰が参加しない場合、肉は信仰の支配者となり、それを殺す。信仰生活そのものをめぐって、この戦いに参加するのはクリスチャンだけである。この種の葛藤は、信仰と聖霊がまだ人に宿っていない限り、自然には存在しない。そのような人は抵抗することなく邪悪な欲望に従う。しかし、信仰と聖霊は肉の欲望に抵抗する。キリスト者の生活はこの葛藤によ

⁸ ルター「ガラテヤ大講解・上」徳善義和訳、『ルター著作集』第2集、第11巻（聖文舎、1985年）190頁

⁹ Preus I. Klemet, *The Fire and the Staff: Lutheran Theology in Practice* (St. Lois: Concordia Publishing House, 2004), 206, 189.

¹⁰ Paul Althaus, *The Ethics of Martin Luther* (Minneapolis: Fortress Press, 2007), 19.